

哲學 眞理

四諦を覺つて禪定に息ひ
邪を廻りて正に歸せしむ
慧眼限りなき甘露の稱名^{みな}はあまねくたたへられ
如來は人天の至尊にして
能はざるなき救世主の
その側らに常住仕へ奉る身が
ともすればその祇園精舎にゐる時でさへ空虚な胸

にひし／＼と喰ひ入る物淋しさは何であらう
あれ程冷やかな 智慧と烈しい意力で
鍛へ上げられた教團の中にも
愚^{カラスカ}なわしは 月に引かるる潮の止むに止まれぬこ
の胸の高鳴りを何うする事も出来ない
あゝ 哀れむべきものは この女のみではない

摩登伽女

お師匠様のお側にゐて何年かの難行苦行覺えたも

のは何で御座んす

あなたが その教へから受けた官能のよろこび
それよりも もつとく 尊い強い眞實の喜びを
この一よさにたつぷりと思はせて上げませう

目には美しい色がある

鼻にはこゝろよい香りがする

舌には甘い味がある

魂がこの世の凡べてを忘れさせる 歡樂と身を蓋ふ

程の性の悦びに

目醒めさせなければ おきませぬ

さあ 阿難様 わたしの目を見て下され

わたしの目を

わたしの目を……

短かくなつた蠟燭の灯が

風もないに よろよるとよろめいた

祇園精舎

佛の言く 鬚髮を剃除して
沙門となり 道法を受くる者は
世の資財を去つて
乞ひ求めて足る事を知り

日中一食し
樹下に一宿し
慎んで再びする勿れと

阿難

自分の惱ましい頭は数しれぬ不審に又しても閉さ
れる
思へば危ふかりし昨日哉
賢い思慮がやうやく自分を引離しはしたもの、

お、誰やら人のけはひ

花菱をつけ 新衣を着

美しい瓔珞を纏うた

おう昨日の女

阿難の後を慕ふ

阿難止れば 止まり

阿難歩めば 即ち歩む

巷より城外に 城外より遂に祇園に

歸る迄も阿難の後を追ふもの

浮世を捨てた自分が 今更

戀も女も自分自らの縁をさへ斷つた身が

この有様 愧かしさ 淺ましさ

慚ぢて避けてもまた執念くつけまどふ

美しき女の影

世尊よ 我を慰れみ給へ

さめくと泣く

世尊

阿難よ 鬼神は邪に 毒害すれども 戒ある人を
犯す事は出来ない

お前は今日何に悩まれたのだ

阿難よ 鏡に寫る佛は虚であらうか 實であらう

か

女心は移り安い

そして常に毒を含んでゐる事は

蛇にも勝つてゐる

女は金剛のやうに 人の身を破り

火焰の様に 人を焦す

その聲は死の響を傳へ

その手は牢獄のやうに人を囚へる

行きて静かに思ひを廻らし

樹下に結跏趺座せよ

精舎の門に来て さめんと泣く女の聲

戀に身も心も狂うた摩登伽女は

世尊の御前に呼び入れられた

世尊

・女よ お前は阿難のどこが好ましいのか

摩登伽女

斯うやつて其の人を前に置かぬ時

想像は 太陽のやうに 餘りの光輝にうたれてい

ふべき言葉もしりませねど

私はたゞ 阿難尊者の目を愛し 口を愛し 鼻を
愛し その聲を愛し その歩行あゆみを愛します

世尊

美しきその阿難の目も鼻も口も阿難の五體は屎尿
を盛る器にすぎない 垢穢の身とは知らざるか

娘よ 色慾は火の様に自らを焼き人をやく

愚痴の凡夫は燈火による蛾の如く炎の中に身を投
けんとする

智者はこれと異り 常に色慾を遠ざけて靜かな樂
を味ふ お前も今から道に入るがよい
沙門の妻となるべきを願ふお前は阿難と同じくそ
の髪を斷つべく母の許を得て來よ

摩登伽女

千筋と撫でし黒髪を斷つに母は惜みて泣いたれど
髪も珠も 瓔珞も 思ふ思ひの叶はぬに何の要が

ありませう この身さへ この心さへ
唯この浮世の最後の願ひ 煩惱の終り 愚痴の末
には どうぞ 唯一言
阿難は眞實 今も私を思うて居りませうか但しは
思はいでか 唯これだけが知り度い

阿難は遂に 思つてゐるとも ぬないとも 思
つてゐたとも ぬなかつたとも
すでに過去の事すらも その瞬間の心のきらめ

きも

遂に 摩登伽女には答へてはくれなかつた

私は思うてならぬ事を思うたのではあるけれど
せめて世の名残りに聞いておきたかつたのに
佛はいふ 思ふも思はれるもつひに五百世の過
去の縁であつたと

せめては忘れた昔の縁と想うて慰めよう

弟は佛子を教ふるには女を悪魔の様に

けれども 女の戀の的となつた男は

女の爲めにはいとしい悪魔ではあるまいか

女は髪を捨て 世を捨て 戀を捨て

阿難は絶ちても 絶ちても 絶ちきれない温情

を世尊に移して

月を經 年を經て 遂に戀も 人も

唯聖らかに入寂した

大正八年三月十日印
大正八年三月十三日發行
大正九年八月五日改訂六版

大正九年改訂版

定價貳圓五拾錢

訂改補增

けかの帳几

著者 伊藤白蓮

發行者 三井玉輝

發行所

東京市芝公園
振替一四一七七

玄文社

所刷印高大社會式株 所刷印

木下利玄氏著

歌集
紅玉

鹽瀬表紙特製美本
定價金壹圓七拾錢

たふれんたふれんとする波の丈をひた押しにおして來る力はも
大き波うねりのびあがり高みより磯もと揺りたふれ落ちたり
舟は沖へうねりは磯へ空の下に行きちがひ行きちがひ浦わ漕ぎ出づ
森ふかみ地に落ちきたる硬き實の枝葉にあたる音はやきかも
堤下の桑の立木にあつかりし日は夕づきてきらめく川水

叙景詩人として定評ある著者の『銀』以後數年間の作から五百
數十首を選集したものである。而して此の數年間は作者の生活
が最も多難な經路を辿つた時代であつて、愛兒を失ふこと二回
夫人と携へて東西に放浪すること年餘、其間無限の詩興を寄せ
て僅かに胸の苦悶を慰めてゐたのである。そして此生活上の試
練は又作者の藝術に大なる影響を與へずには措かなかつた。即
ち、其の作品が圓熟大成の域に入つたのは此の時代で、今や氏の
歌は現代叙景詩の最高標幟として喧傳されてゐる。

391
141

終

